

私の養鶏随想録

加藤 宏光

アメリカ視察

独立する前に、アメリカはカリフォルニアの生産現場を見聞する機会が与えられた。37年前の当時は、カリフォルニア州には3000万羽ほどの採卵鶏が飼育され、100万羽を超える規模を誇る先進型の農場があった。日本では10万羽でもかなり大規模に含められる時代であったから、100万羽という飼養規模は驚くほどといえる。

熱心な養鶏家の招きで、カリフォルニア州立エクステンション・サービスセンターという採卵養鶏生産者向けの研究所があり、そこで生産者を指導していた《ドナルド・ベル=ドン・ベル》という技術者を日本に招き、講習会を開いた。

たまたま機会を得た筆者も、ドン・ベルの講習会を聞く機会を得た。残念ながら、そこでどのような内容が話されたのか、は覚えていない。

講習の後、立食パーティーが持たれ、2次会で銀座のクラブ（らしいところ）へ繰り出したが、その席へも参加が許された。もっとも、親しく話すことはできず、ただ回りで雰囲気を楽しんでいた。当時すでにカラオケは当たり前で普及していた。講習会の主催者の奨めでドン・ベルが歌ったのは《想い出のサンフランシスコ》。それは素晴らしいテノールであった。

それからしばらくして、研修農場のオーナーから『アメリカの採卵業界を視察してこないか?』というお話をいただいた。当時、筆者の接していたサラリーマン世界では《アメリカへ行く》というのは特別なことであった。

これまでに紹介した上野製薬という会社ではAF2とDZDの防衛のために、研究部門の責任者にア

メリカの事情調査で出張をさせたことがある。筆者の転職の前々年のことであった。

毎朝報告を8mm映画で紹介されたが、見るシーンも話も別世界であったことを覚えている。部門責任者は筆者の先輩であったが、土産話として、レンタカーでの移動に際して驚いたこととして《クルーズコントロール》を挙げた。

『アクセルを踏まないでも、指定スピードで走る。その道路は8車線なんだ!!』

いま、日本車でもクルーズコントロールが装備されているモノは少なくないが、40年も前に聞かされたその話は刺激的であった。そのアメリカへ行って、採卵業界（農場）をこの目で見る事ができる。夢のように感じられた。

アメリカ行きの飛行機はチャイナ・エアライン（台湾）。出発は羽田空港。こう言われても若い人たりには何の違和感もないだろう。しかし昭和52年（1977年）当時、ほとんどの国際線が成田発であり、羽田空港はもっぱら国内専用であった。田中角栄元首相が中国との国交を再開して2~3年。それまでは台湾こそが中国であり、現在の大陸・中共は国と認知されていなかったが、中共とわが国が国交を樹立すれば、台湾の扱いは国と国の交わりというわけにはいかない。こうした事情が関係したものであろう。とにかく筆者たち（大型採卵会社の勤務獣医師E氏と養鶏専門開業獣医師S氏=S氏は現在は業界と離れている）は羽田からカリフォルニアへ向かったのである。

カリフォルニアに到着

カリフォルニアでは空港から直ちにレンタカーでリバーサイドというエリアへ向かう。到着したのはカリフォルニア時間の午後7時前だったろうか?! 日本の夕暮れに比べると、昼下がりのように明るく感じられる。

何もかもが初めてのアメリカで、何より驚いたのはすべての大きさであった。モーテルにしても、10畳以上もあるベッドルームにサイドルームまである。S氏と相部屋であったが、日本のホテルのルームサイズと対比すると、わが国のモノはいかにも見劣りがする（最初は素晴らしく見えたこのモーテルも、幾度かの訪米で慣れた目で見れば決して贅沢なものではなく、一泊4000円程度で泊まれるビジネスモーテルであった）。

その後、3人揃って徒歩で近場のステーキハウスに入った。ステーキは定番のミディアムレア。アイダホポテトが付いた贅沢な食事が35ドルほどである（もっとも当時の1ドルを円換算すると240円であったから、35ドルは8500円ほどで、さほど安くもなかったのではあるが、それこそ草鞋ほどもあるステーキサイズに圧倒されて、相当安く感じたものである。現在なら3500円にもなるか?! ちなみにファミリーレストランでアメリカンビーフステーキ定食は1300~1500円であるから、日本の経済力がいかに強くなったかを、こんなところでも確認できる）。

モーテルの部屋で、満腹の上、時差に疲れた体をベッドに横たえたものの、眠いはずなのに寝付けない。『これが時差なのか!!』などとボンヤリ考えているうちにウトウトしていたのであろう。突然、パトロールカーのけたたましいサイレンで飛び起きて窓の外を見ると、警察のものと思われるヘリコプターが近くの民家とおぼしき家をサーチライトで照らしながらグルグルと飛び続けている。

何が起きたのかは判らないが、事件である。その像はまるで映画に出てくるシーンそのまま。

『うーん、これこそアメリカだ!!』

と妙な感心をしながら眺めていた。E氏によれば日常茶飯事なのだそう。

養鶏技術サービスセンター

翌日7時前にモーテルの部屋までドン・ベルが迎えに来た。聞くところによれば、アメリカ人は時間に厳しく、自分の時間を大事にする人種で、時間外に働くことを厭わない日本人とは根っこから違う、はずであった。しかし、目の前のドン・ベルはそれこそ時間外も時間外、7時前にすでにここに居るではないか。

『これは仕事だろう。いったいこれまで日本で聞いていたアメリカ人はどこにいるんだ』

ドン・ベルのトラックを追いかけて20~30分走ると、平屋の建物がある。これがカリフォルニア州立ポーター・エクステンション・サービスセンター（養鶏技術サービスセンター）である。養鶏生産技術を研究・開発するとともに、開発した技術を養鶏生産者向けに紹介することを目的としている。

カリフォルニア州はこれ以外にも州立鶏病検査研究センターも数カ所持っている（家畜保健衛生所が鶏に特化している）。

そこで、ドン・ベルが当時検証していたケージ設備（リバーシ・ケージ）の生産性能や飼料中のアミノ酸の必要量検定データなどを紹介された。いまだから40年も前に、州立研究所がこれだけキメの細かい技術サービスを生産者向けに行っていたのは、さすが、と言える。

もっとも実験をもって技術を検証し生産者へ紹介する、というサービスはドン・ベルの個人的性格が大きく影響しているようである。彼以外に、アメリカから生産者向けの実用的な技術を開発し、紹介しつづけている研究・技術者は出ていないようであるから…。

その時の資料を時々引っ張り出して見るが、メチオニン、シスチンやトリプトファンなど必須アミノ酸（制限アミノ酸ともいう）の含量を変えた飼料を実際に200羽ほどの採卵鶏に与えながら性能を検証したデータや、ケージの間口・奥行きを変えて4~6羽を群飼した場合の成績を対比して効率を確認したデータなどを毎月短報としてリリースしていることは当時のアメリカの産業への姿勢を肌で感じさせるものである。

その後、ドン・ベルの案内でカリフォルニア州最大級の採卵会社、エッグ・シティを訪問した。農場はオープンシステムで、4~5羽飼うケージを1段に設置した鶏舎が一面に並んでいる。鶏舎の収容羽数は1棟9万羽であった。

現在でこそ1棟20万~30万羽のウインドウレス鶏舎は珍しくないが、当時日本では平均的な鶏舎サイズは6000~7000羽で10万羽の採卵農場はかなり大規模とされていた。1棟で9万羽の鶏舎が10数棟、それも1段飼育であるから、とにかく広い敷地に大きな鶏舎が10あまり並んでいる様は壮観とも言える。

配餌は電動モーターカーで、集卵も電動モーターカーで手作業で行っている。基本は日本と変わりはないが、電動モーターカーのスピードが違う。時速5~6Kmで走る車に乗ったヒスパニック系の集卵作業員が目にも止まらぬ早さでケージ前に並ぶ卵を拾い上げてトレイへ納めている。効率化のあり方を学ぶことができるシーンであった。

（筆者：(株)ピーピーキューシー代表取締役社長／
農学博士・獣医師）